

有機・高分子化学専攻の紹介

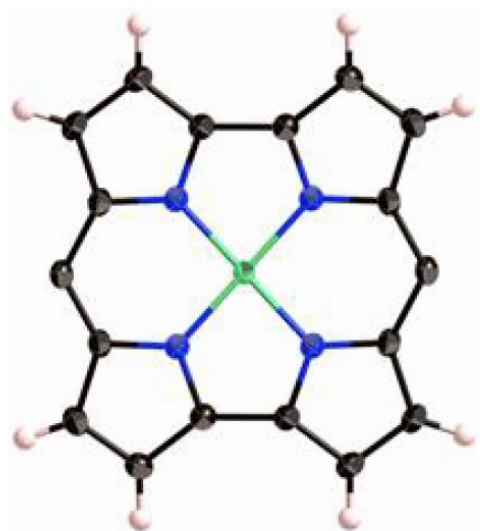
1. 忍久保研究室（構造有機化学研究室）
2. 大井研究室（有機反応化学研究室）
3. 石原研究室（触媒有機合成化学研究室）
4. 野呂グループ（高分子物性学研究室）
5. 上垣外研究室（機能高分子化学研究室）
6. 竹岡グループ（高分子組織化学研究室）
7. 井改研究室（超分子・高分子化学研究室）

忍久保研究室 有機構造化学研究室(有機・高分子化学専攻)

新しい π 電子化合物を創る・その性質を探求する

構造

新しい構造
美しい形



物性・機能

色・蛍光・分子認識・
触媒作用・伝導性・
超分子



応用

有機太陽電池
有機半導体
エネルギー貯蔵
癌治療

教員



忍久保



福井



高野

美しい分子には優れた機能が宿る

研究室HP <http://www.chembio.nagoya-u.ac.jp/labhp/organic1/index.html>

研究室Twitter @shinolab

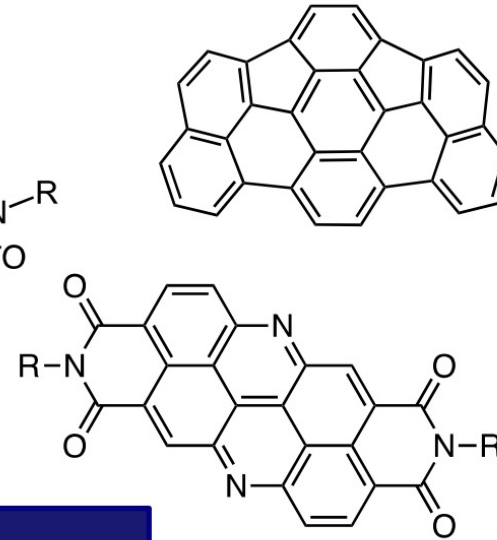
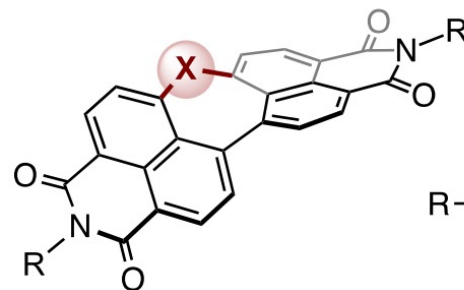
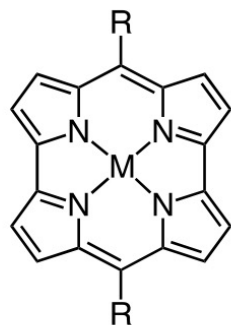
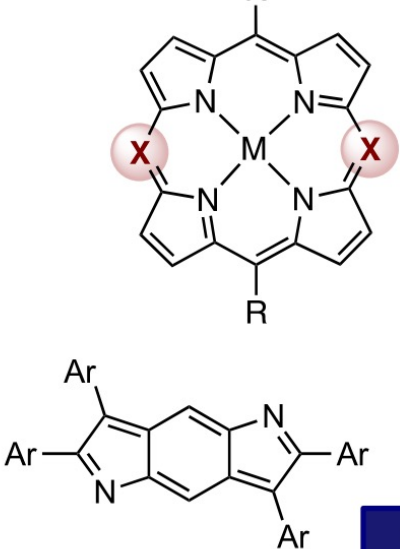
忍久保研究室

(構造有機化学研究室)

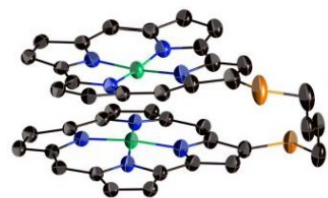
有機構造化学研究室では、新しい π 電子化合物の合成とその性質を探索する研究を行っています。美しい分子には優れた機能が宿るという信念のもと、見た目にも美しい分子を有機合成化学の手法を用いて合成します。実際に分子を合成したあとは、その分子の性質や機能を探る研究を行います。そして、優れた特性をもつ分子は、有機太陽電池、有機半導体、有機蓄電池、がん治療への応用を目指して、さらに研究を展開していきます。研究室の詳細についてはホームページを見ていただければと思います。

現在、行っている研究をまとめるとこれらの3つになります。研究室の基本となっているのが「新規有機 π 電子化合物の創成」です。これまでにここに示す多彩な独自の分子を生み出してきました。新しい化合物が得られたら、それらの性質を解析し、「新奇現象の創出と解明」につなげます。例えば、反芳香族化合物が積層したときに生じる三次元的な芳香族性は当研究室が世界で初めて実験的に見つけたものです。また、合成した化合物の「電子材料や医療への応用」にも取り組んでいます。これまでに独自の分子を蓄電池の活物質や有機半導体として応用したり、多剤耐性菌やがんへの治療に使う研究を行いました。

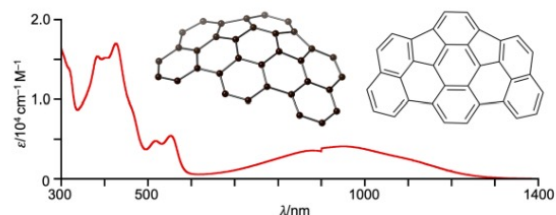
新規有機 π 電子化合物の創成



斬新で美しい分子を創り、
機能を解明する。

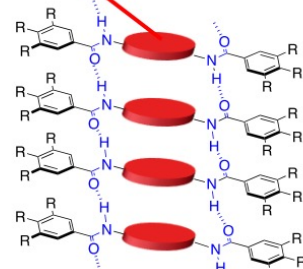


積層芳香族性の実験的実証



安定性と近赤外吸収の両立

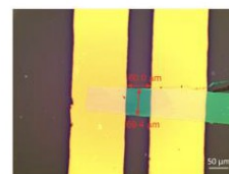
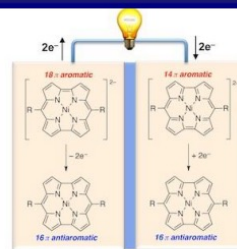
Antiaromatic



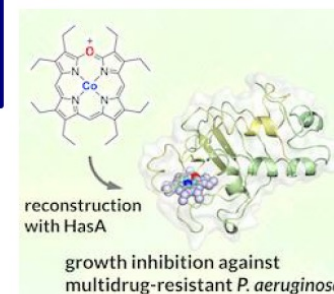
反芳香族超分子



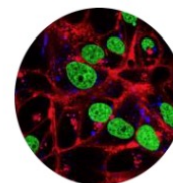
電池の活物質



有機半導体



多剤耐性菌への抗菌作用



光線力学療法

有機 π 電子化合物の
新奇現象の創出と解明

電子材料や医療への応用を目指した
構造制御と機能開拓

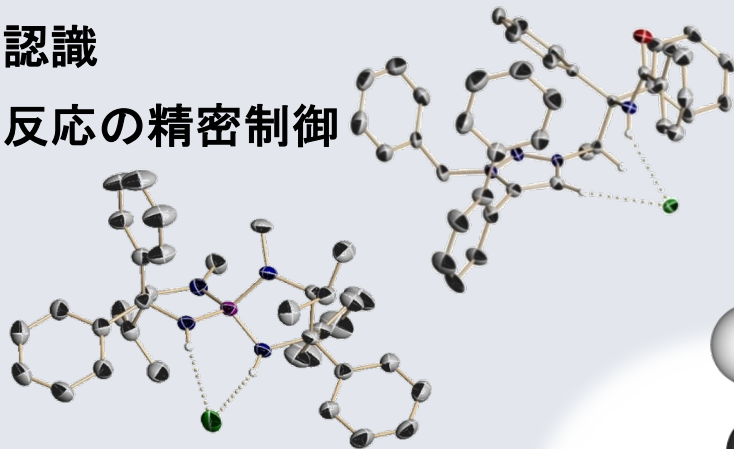
有機反応化学グループ（大井研究室）

大井研究室

（有機反応化学研究室）

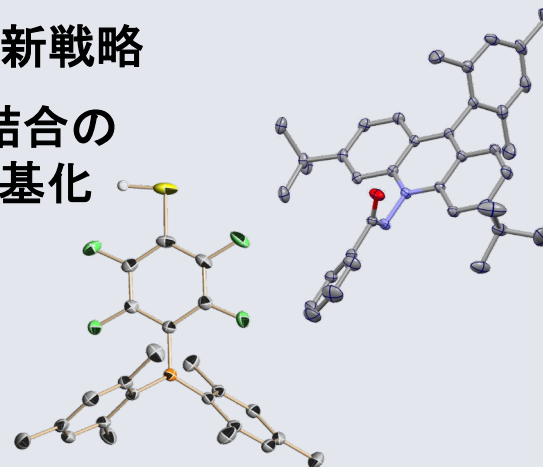
キラルイオン性分子触媒

- 分子認識
- 化学反応の精密制御

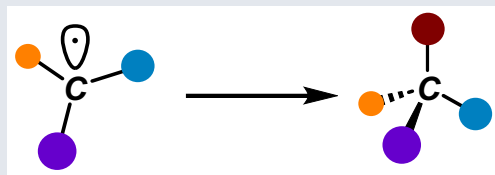


C-H結合を活性化する光触媒

- 触媒設計の新戦略
- 炭素-水素結合の直接的官能基化



選択的ラジカル反応

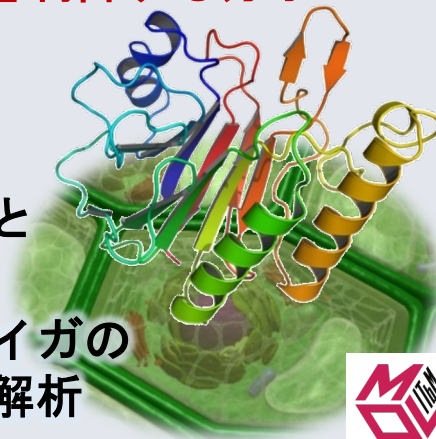


- 位置・立体選択性の触媒制御

分子を生み出し
新たな機能を
創出する

生命現象を制御する分子

- 体内時計の理解と制御
- 寄生植物ストライガの発芽・寄生機構解析



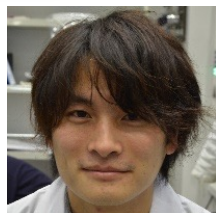
有機反応化学グループには、研究室を主宰する大井先生に加え1名の准教授と2名の助教の先生が所属しています。大井研では、分子の力に注目した研究を展開しており、特に、独自のイオン性有機分子を生み出し、その構造に根差した触媒としての新たな機能を引き出すという方向性で多くの成果を挙げてきています。また、トランスフォーマティブ生命分子研究所における生物学者との共同研究にも取り組み、これまで培ってきた分子化学者としての知見を生命現象の制御に活かし、ユニークな成果につなげています。



教授 大井 貴史



特任准教授
武藤 慶



助教
荒巻 吉孝



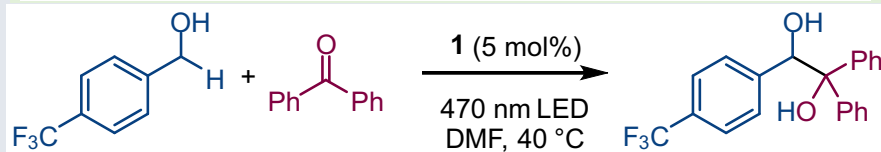
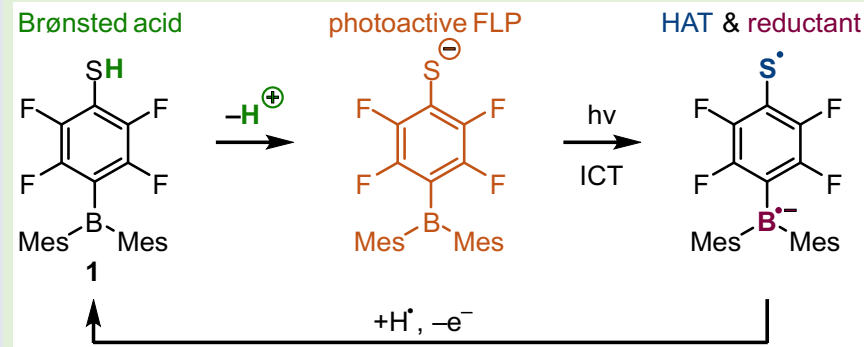
助教
中島 翼

代表的研究成果

大井研究室

(有機反応化学研究室)

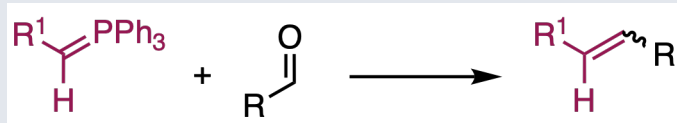
三役を担う新しい光触媒



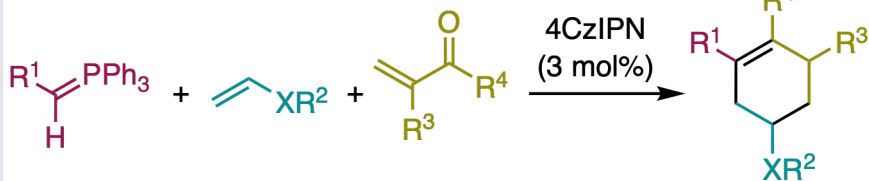
J. Am. Chem. Soc. **2024**, 146, 20425.

ラジカルの特性を活かした新反応

- 教科書にも登場するWittig反応

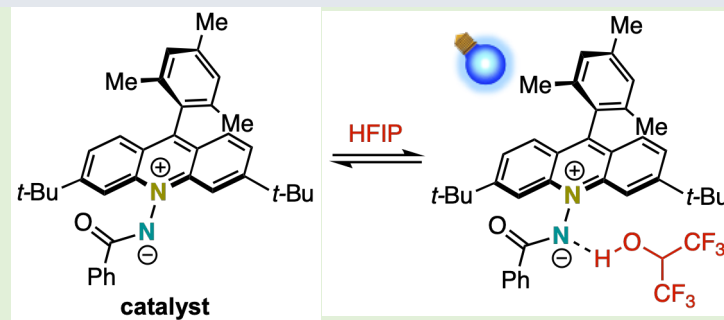
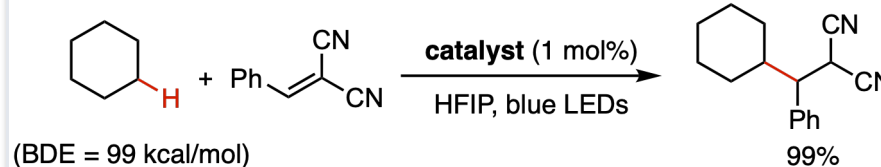


- 触媒の力で新しい反応性を引き出す



Nat. Synth. **2024**, 3, 1385.

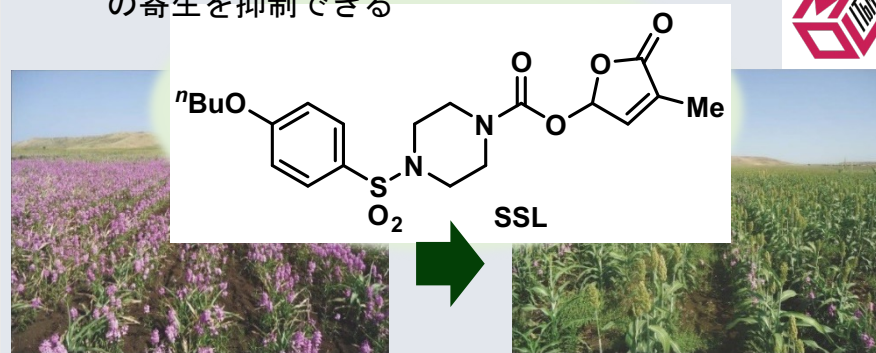
炭素-水素結合を切る新しい触媒



Angew. Chem. Int. Ed. **2024**, 63, e202404890.

深刻な農業問題の解決

- フェムトモル濃度で効くストライガ用自殺発芽剤
- 作物や共生菌などに影響することなくストライガの寄生を抑制できる



ストライガ汚染畑

健全な畑 (目標イメージ)

Science **2018**, 362, 1301.

最近の研究成果を紹介すると、三つの役割を担う光活性な有機分子触媒であるポリルチオフェノールを独自に創製し、その機能を活かしてアルコールとケトンとを直接カップリングさせる高難度な反応を実現しました。また、適切に構造設計した双性イオン型アクリジニウムアミデートが安定なアルカンのC-H結合を変換する優れた触媒として機能することを実証しています。さらに、教科書にも登場し、古くから研究されてきたWittig反応剤の全く新しい反応性を触媒の力を合理的に利用することで引き出し、革新的な反応を実現しています。生物分野への貢献としては、アフリカの穀物生産に大きな打撃を与えている寄生植物であるストライガの撲滅を目指したプロジェクトに参画し、極めて低い濃度で選択的にストライガを駆除できる分子、スーパーストリゴラクトンの開発に成功しています。

このように大井研究室は、分子の力を巧みに使って、フラスコ内から生体内までの有機化学反応の制御と理解に挑んでいます。



K. ISHIHARA
GROUP
green catalysis

有機・高分子化学専攻 触媒有機合成学研究グループ

石原研究室

(触媒有機合成学研究室)

酵素の機能に学び
酵素を凌駕する
テーラーメイド型人工触媒
で世界一を目指す！

基礎研究課題

酸塩基複合型高機能触媒の設計・開発(人工酵素)

超分子不斉触媒の設計・開発(人工酵素)

デザイン型Brønsted酸触媒の設計・開発(人工酵素)

デザイン型ハロゲン触媒の設計・開発(グリーン)

光・ラジカルカチオン触媒の設計・開発(グリーン)

バイオミメティックカスケード反応の開発(生合成)

応用研究課題(企業との共同研究)

エステル・アミド縮合触媒の開発(グリーン)

医薬品・化成品・機能性材料の合成法の開拓
(プロセスケミストリー)

触媒有機合成学研究グループでは、有機反応の反応性と選択性を思いのままに制御する高機能触媒の開発研究をしています。これまでに、研究室独自に体系化した酸塩基複合化学を基盤に、様々な酸塩基複合型高機能触媒を開発してきました。

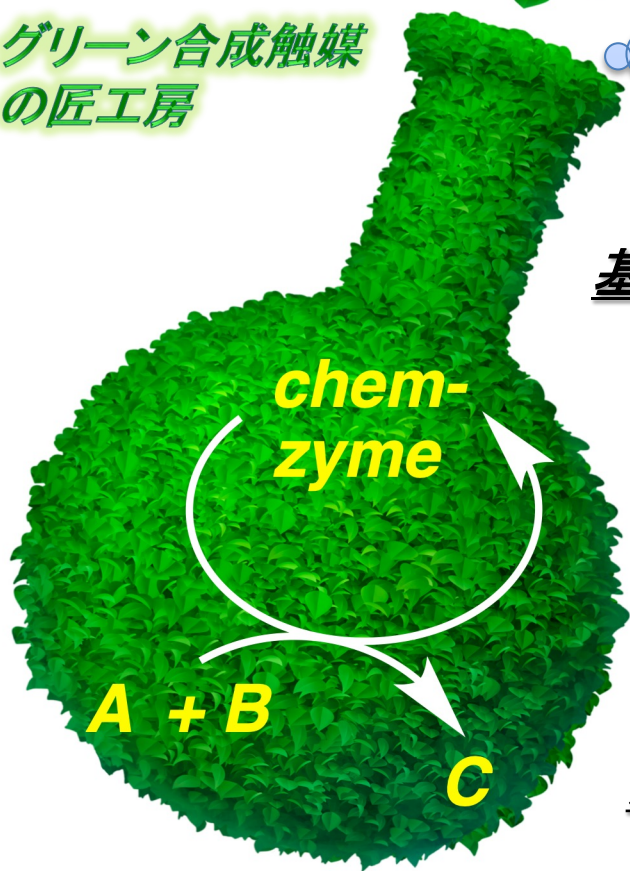
グリーンサステナブルケミストリーの観点から特に生体反応に着目しています。生体系では酵素が触媒の役割を果たしています。我々は環境に優しい酵素の機能に学び、酵素を凌駕するテーラーメイド型人工触媒の開発を究極の目標に掲げています。

例えば、小分子触媒では制御困難な高次選択性の制御を目的に、精巧な鍵穴を有する超分子不斉触媒の設計・開発を、また、ワンポットで複数の反応を連続的に行うことのできる理想的な合成プロセスとして、バイオミメティックカスケード反応の開発研究をしています。

元素戦略の観点から、金属ルイス酸の代わりにBrønsted酸を、レアメタルや重金属の代わりにハロゲンを代替元素に用いた触媒開発を通して、グリーンサステナブルケミストリーに貢献しています。

また、工業的に重要なエステルやアミド合成用の触媒開発にも力を入れており、企業との共同研究も幾つか実施しています。特に医薬品などの合成を目的にした化学プロセスの研究なども実施しています。

グリーン合成触媒
の匠工房



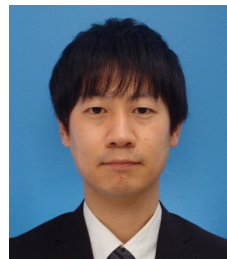
Green Catalysis & Synthesis

石原研究室 2026年度メンバー



石原研究室

(触媒有機合成学研究室)



教授 石原一彰 准教授 UYANIK Muhammet 助教 大村修平 秘書・事務員 1名

博士研究員: 1名

大学院博士課程(3年間): D3 4+1(G30)名、D2 3+1(G30)名、D1 2名

大学院修士課程(2年間): M2 4名+1(G30)名、M1 4名

学部4年生: 5名



石原研HP

卒業後の進路

企業研究・技術者(化学・医薬・化粧品・食品系)

第一三共、田辺三菱製薬、塩野義製薬、小野薬品工業、JT、住友化学、
三菱ケミカル、旭化成、富士フイルム、花王、JSR、信越化学、東亜合成、etc.

大学教員、海外博士研究員

名大、九大、北大、千葉大、静岡県立大、UC Berkeley、Princeton U.、etc.

研究室の主宰者は石原教授であり、ウヤヌク准教授や大村助教と協力して、研究室を運営しています。2026年度は、博士研究員1名、博士課程学生が11名、修士課程学生が9名、学部生が5名の合計25人が在籍しています。

卒業後は化学・医薬系の企業か大学へ研究者として就職しています。中には海外の大学で博士研究員として数年研鑽を積んでから大学教員になる人もいます。

高分子物性学研究室 野呂グループ

研究内容: 分子制御・ナノ構造制御に
基づいた次世代高分子材料開発

取り組み姿勢:

学術に基づきながらも、
工業化・実用化まで見据え、
社会にも還元される研究の実践

重要テーマ

1. 次世代燃料電池用
新規プロトン伝導性
高分子電解質の開発
2. 次世代構造用接着剤及び
非共有結合性エラストマーの開発

名古屋大学
野呂グループ



梶田博士

(2026年度より特任助教)

高野特任教授
(協力教員)

主所属:
量子化学
イノベーション
研究所



野呂講師

マテリアル
イノベーション
研究所・
脱炭素社会
創造センター
兼務

野呂グループ

(高分子物性学研究室)

高分子物性学研究室（野呂グループ）は、野呂講師、梶田博士、学生7名、研究員・補佐員4名からなる研究グループです。量子化学イノベーション研究所を主所属とする高野特任教授にも、協力教員として関わっていただいています。

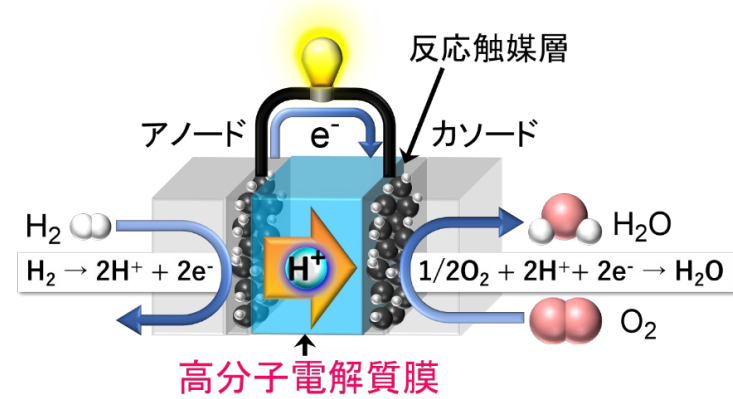
「学術に基づきながらも、工業化・実用化まで見据え、社会に還元される最先端高分子材料化学研究」を実践すべく、企業等とも連携しながら、分子制御・ナノ構造制御に基づいた次世代高分子材料の研究開発を進めています。

重要な研究テーマは、
・次世代燃料電池用新規プロトン伝導性高分子電解質の開発
・次世代構造用接着剤および非共有結合性エラストマーの開発
です。

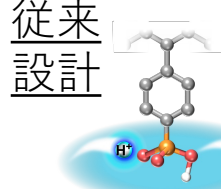
大学院生: 5名、学部生: 2名、博士研究員: 1名、研究員: 2名、補佐員: 2名

1. 次世代燃料電池用新規プロトン伝導性高分子電解質の開発

固体高分子形燃料電池 (PEFC)



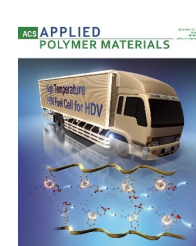
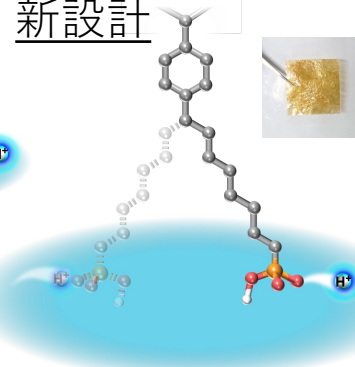
従来
設計



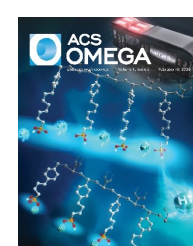
燃料電池の効率向上へ新材料
名古屋大学などの研究グループは燃料電池の性能を高める重要な材料「電解質膜」に向けた新材料を開発した。従来の燃料電池膜に搭載されている燃料電池はセレン酸-炭素で構成する。効率的な膜に設計して100度以上の高温動作に向けた研究開発が進められ、電解質膜に搭載されている「アノード」の材料は100度を超える性能が大幅に向上した。研究グループは、電解質膜の性能向上を目指し、100度以上で動作できるようにした、新規的な燃料電池の電解質膜材料「PFA-S」を開発した。2024年12月の発表。

日本経済新聞 2024/12/24 19面
日経電子版 2024/12/22

新設計



ACS Appl.
Polym. Mater.
2024, 6,
15150-15161.

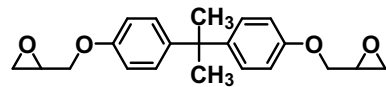


ACS Omega
2026, 11,
8272-8282.

2. 次世代構造用接着剤及び非共有結合性エラストマーの開発

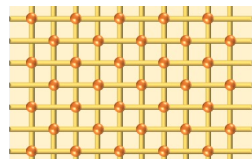
従来材料

エポキシ樹脂プレポリマー



硬化

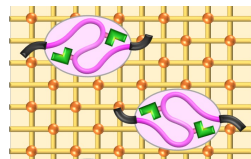
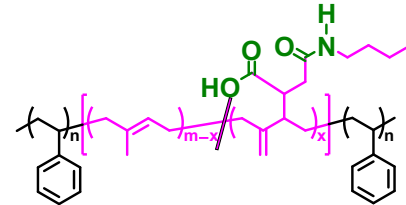
エポキシ樹脂硬化物



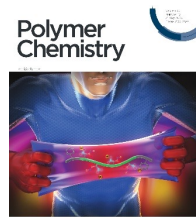
低衝撃強度、
低剥離強度
(脆い)

開発材料

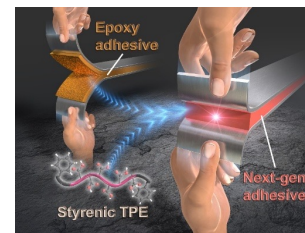
ゴム成分と
水素結合の



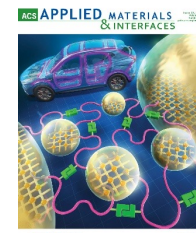
耐衝撃性が
22倍向上



Polym. Chem.
2025, 16,
2232-2243.



ACS Appl. Mater. Interfaces
2024, 16, 65270-65280.



化学工業日報
2024/10/7 4面



日刊工業新聞
2024/9/25 29面

野呂グループ

(高分子物性学研究室)

究極のエコカーと呼ばれる燃料電池自動車や、家庭用コジェネレーションシステム「エネファーム」などには固体高分子形燃料電池が利用されており、プロトン伝導性高分子電解質膜はその中核材料の一つです。本研究グループでは、新規化学構造を有する次世代高分子電解質材料の開発に取り組んでいます。

また、本研究グループでは、一般に低強度とされるゴム・エラストマーおよび関連材料に対し、弱い結合とされる非共有結合を意図的に組み込み、軽量ながらも高強度・高耐衝撃性を併せ持つ接着剤およびエラストマー材料の開発も進めています。軽量・高強度な高分子材料への置き換えにより、輸送エネルギー削減等を通じて脱炭素化にも貢献します。

基礎に立脚し、社会で通用する“研究力”を育む。

野呂グループは、基礎から実装までを一貫して学べる研究室です。

基礎を土台に、社会で通用する“研究力”、身につけませんか？

機能高分子化学研究グループ 上垣外研究室

上垣外研究室

(機能高分子化学研究室)

メンバー構成 (2025年度)

教授 上垣外 正己

講師 内山 峰人

助教 渡邊 大展

事務補佐員 1名

博士課程学生 1名 (GTR)

修士課程学生 14名 (2名GTR)

学部4年生 6名

短期留学生 1名 (フランス)

海外の大学や国内企業との共同研究

主な研究内容

◎新しい精密重合反応の開発

- ・分子量制御 (リビング重合)
- ・立体構造制御 (立体特異性重合)
- ・モノマー配列制御 (選択的共重合)

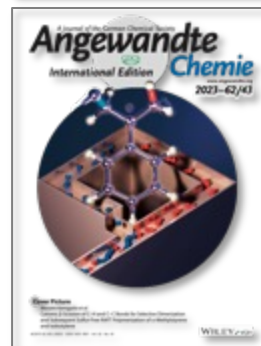
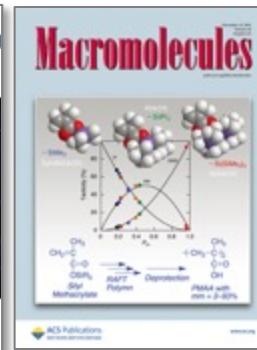
◎高機能、高性能高分子の精密合成

◎新規バイオベースポリマーの開発

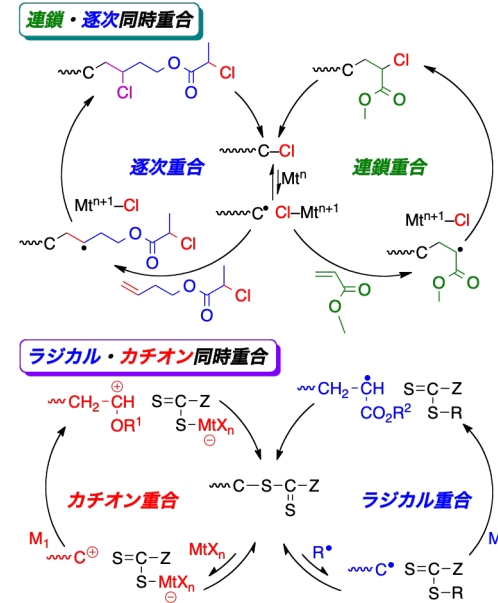
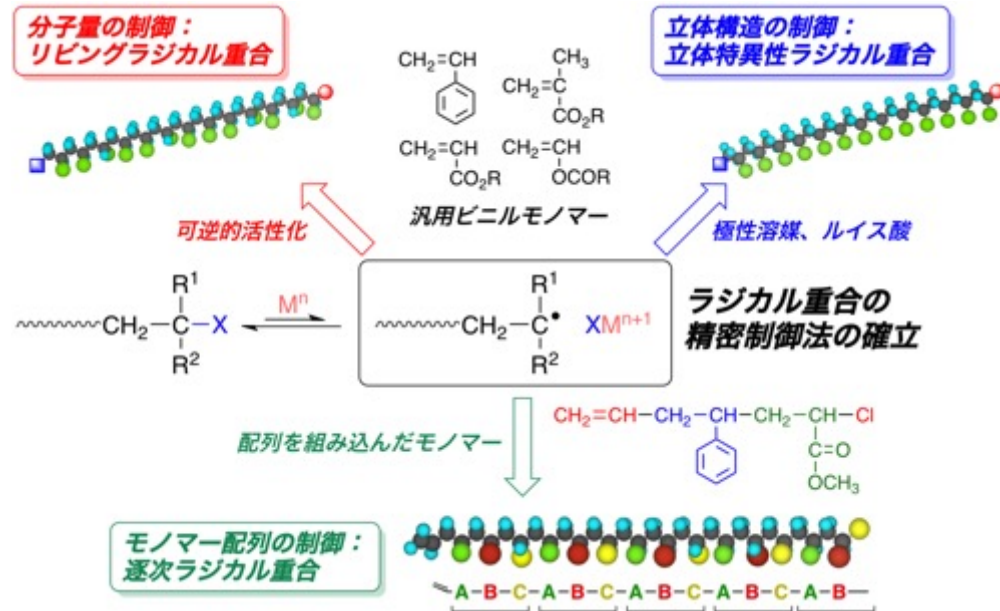
- ・植物由来モノマーの精密重合

◎分解性ポリマーの開発

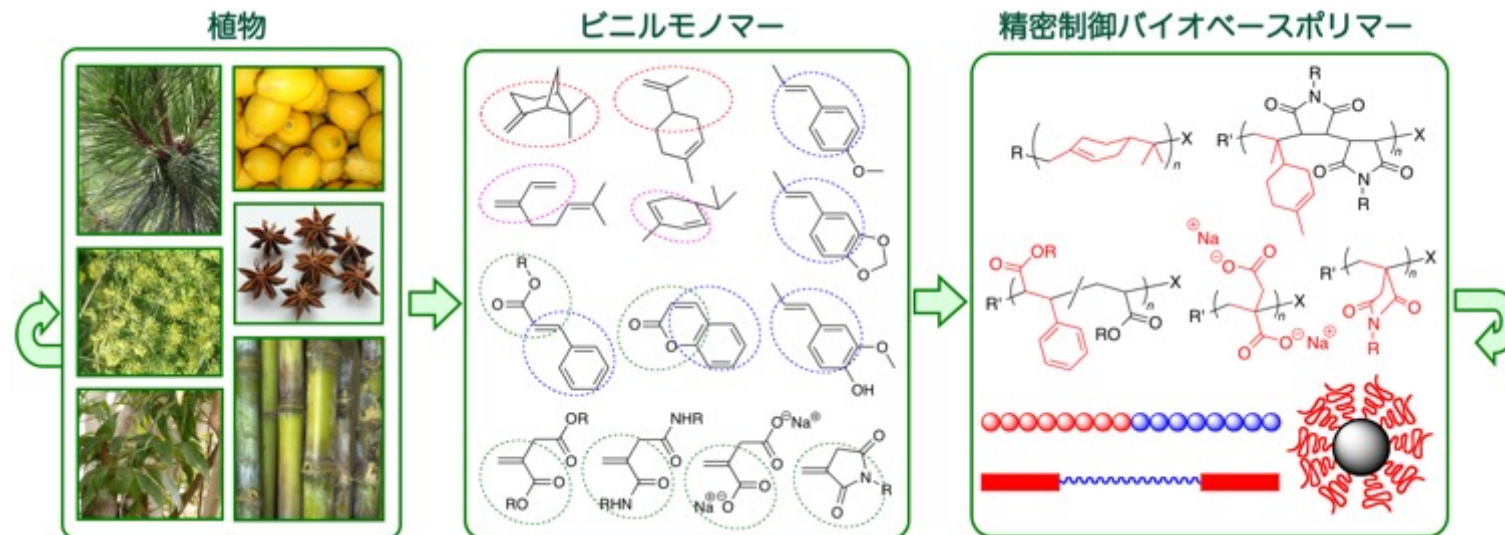
有機・高分子化学専攻 機能高分子化学研究グループ 上垣外研究室は、高分子合成、とくにポリマーの分子量、立体構造、モノマー配列の制御を可能とする新しい精密重合反応の開発と、それによる高機能、高性能高分子の精密合成、さらに植物由来モノマーの精密重合による新規バイオベースポリマーの開発、分解性ポリマーの開発に関する研究を行っています。海外の大学の学生や教員、企業の研究者が短期滞在したり、海外の大学に研究留学したり、独自の精密重合技術を活かした共同研究も行っています。研究の詳細などはホームページをご覧ください。



新しい精密重合反応の開発：分子量、立体構造、モノマー配列の制御



新規バイオベースポリマーの開発：植物由来ビニルモノマーの精密重合



研究室で行っている研究の概要を示します。例えば、工業的に広く用いられているビニルモノマーのラジカル重合において、共有結合種からラジカルを制御して可逆的に生成させることで分子量の制御を可能とするリビングラジカル重合、極性溶媒やルイス酸の配位やモノマー設計に基づく立体特異性ラジカル重合、配列を組み込んだモノマーの設計や選択的な共重合反応に基づくモノマー配列制御重合などを開発し、これらを組み合わせることで、ビニルポリマーの多重構造制御の研究へと発展させています。また、異なる反応機構で進む重合系、例えば連鎖重合と逐次重合、ラジカル重合とカチオン重合などをうまく組み合わせることで、これまでにない連鎖をもつ新規ポリマーの開発も行っています。

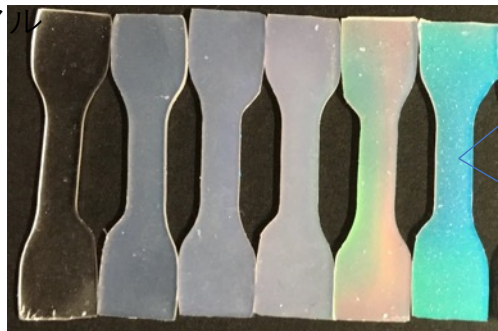
さらに、植物由来の化合物から誘導されるビニル化合物の特殊な構造を活用し、その精密重合系を開発することで、性能や機能に優れた新規バイオベースポリマーや分解性ポリマーの開発を行い、持続可能な社会の発展に貢献できる高分子合成技術の開発をめざしています。

有機・高分子化学専攻 高分子組織化学 竹岡グループ

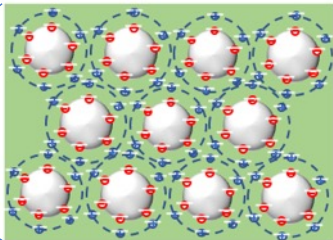
高分子や液晶物質の機能を精密に設計
バイオインスパイアード材料、機能性ポリシロキサン
材料、機能性ソフトマテリアル、
構造色発色性複合エラストマーなど

生物に倣う機能材料

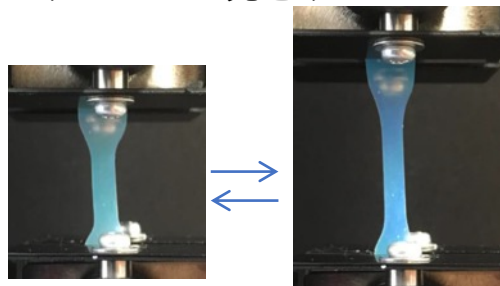
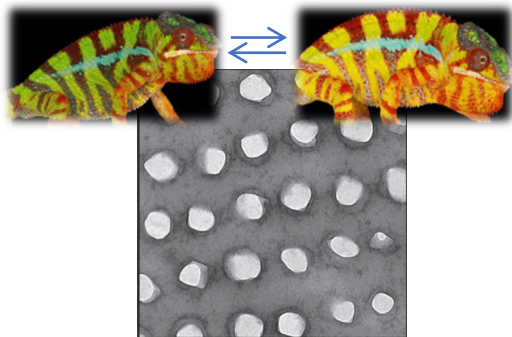
- ・ カメレオンのように刺激に応じて色を変えるソフトマテリアル



Vol% of SiO₂ Particle



高分子から成る網目中に
微粒子が秩序構造を形成
することで発色する



伸張－収縮に応じて色が変わる
応力をセンシングできる

カメレオンの細胞にも秩序構造 ACS Applied Polym. Mater., **2**, 4078 (2020)



浅井文雄
特任准教授

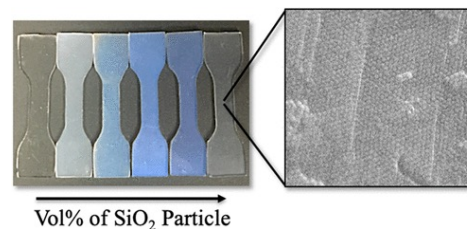


竹岡 敬和
准教授

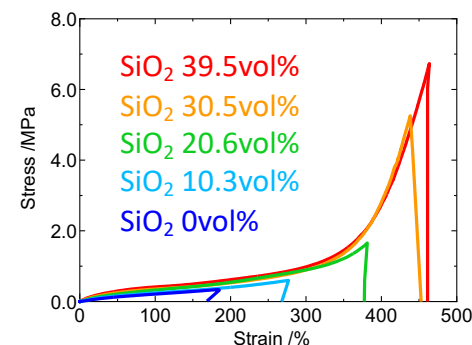
- ・ 角膜に倣い光学的に透明で生体軟組織のような力学物性を示す生体適合性ソフトマテリアル



生体軟組織のよう
に、少し引っ張っ
た場合には柔らか
いが、大きく引っ
張ると伸びにくく
なる。



粒径100 nmの粒子を分散
したエラストマー：光学
的に無色透明でタフなソ
フトマテリアルになる



ACS Mater. Lett., **2**, 325 (2020)

ACS Applied Mater. & Interfaces, **12**, 46621 (2020)

竹岡グループ

(高分子組織化学研究室)

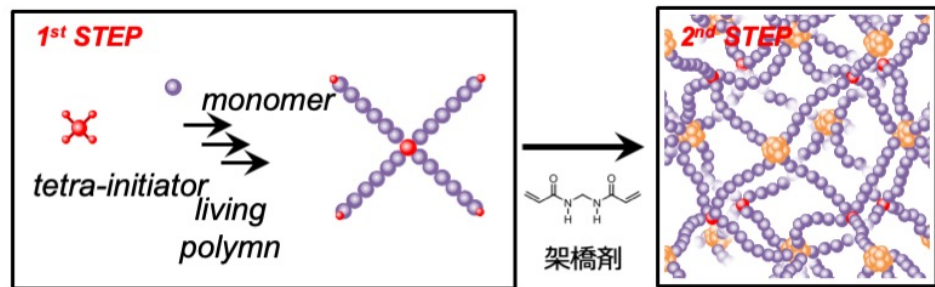
竹岡グループでは、高分子や液晶物質などのソフトマテリアルが本来有する多様な機能を最大限に引き出すことを目的として、分子配向法や配列制御法の開発とその応用研究を進めています。

例えば、生体組織に学び、微細な秩序構造の形成およびその動的な変化を人工材料に付与することで、光学的・機械的に高機能なソフトマテリアルの構築に取り組んでいます。

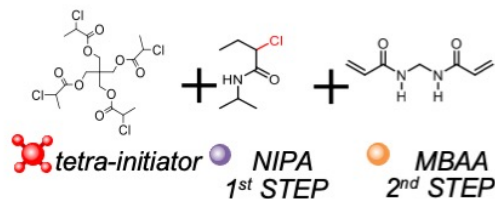
このようにして得られたソフトマテリアルは、カメレオンの体表のように環境変化に応答して色を変化させたり、眼球の透明組織である角膜に類似した高い光透過性と、生体組織に近い力学特性を併せ持つなど、従来材料にはない特性を示します。

精密合成を利用したゲル

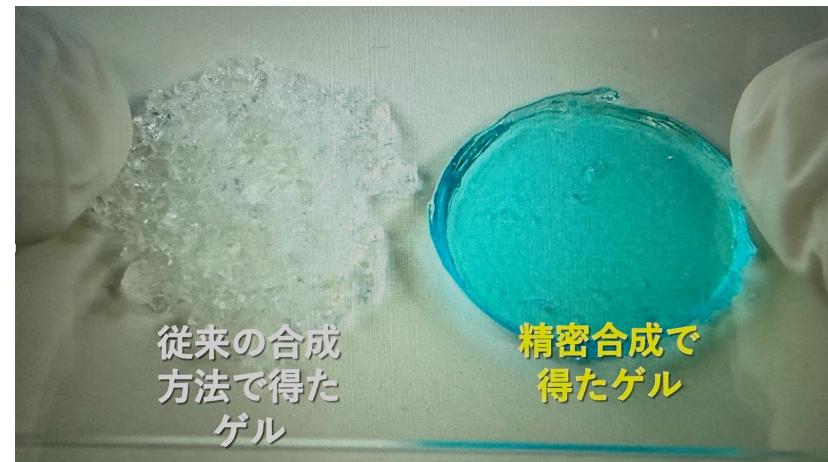
ツール化された精密合成法によりワンポットで調製



core-first method → linking method



必要な化合物を段階的に加えるだけで均一な網目構造を構築



精密合成で調製したゲルは、従来の合成方法で得られるゲルと比べて力学的に壊れにくくなる。

竹岡グループ

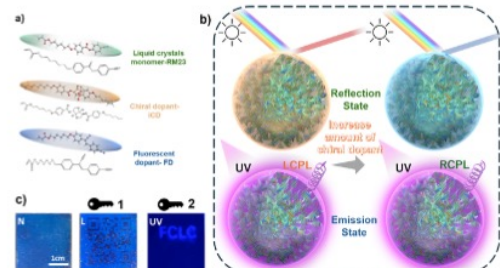
(高分子組織化学研究室)

また、精密合成法を用いて非常に高い秩序性を有する高分子網目ゲルを開発し、その均一な網目構造を活かしたタフな材料設計や、網目内の発光性微粒子の合成にも取り組んでいます。

さらに、ポリロタキサンなどの超分子をビルディングブロックとして高分子網目を構築することで、従来のゲルやエラストマーと比べて、柔軟でありながら極めて高い伸長性を示す新規ソフトマテリアルの創製も行っています。

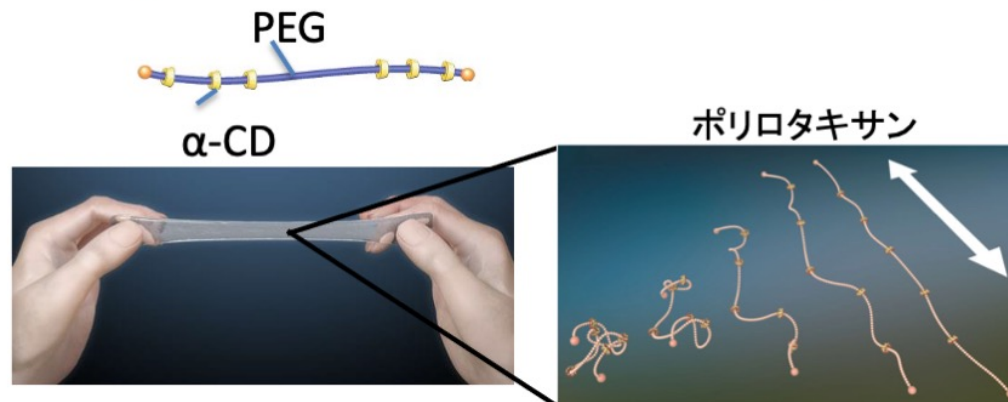
加えて、色素や顔料を用いることなく、安全な高分子や微粒子の配列構造によって鮮やかな構造色を発現する材料を見出しており、新しい色材としての応用展開にも挑戦しています。

構造発色性材料



材料を秩序だった集合状態にすることで様々な色を発色

超分子を用いたタフポリマー



超分子(分子レベルの秩序を有する分子)の一種であるポリロタキサンを用いた強くてもしなやかな高分子ゲルやエラストマー



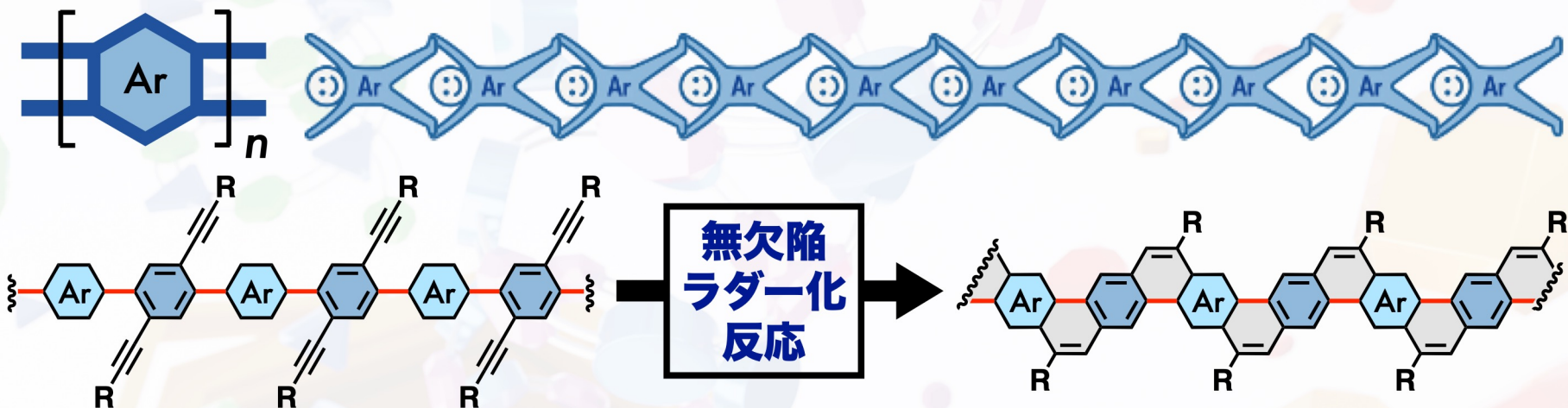
井改 知幸
(教授)



吉田 真也
(助教)

新反応開発を基盤とした 合成高分子の立体構造制御と機能デザイン

ラダーポリマー：環状のモノマー単位が2本以上の化学結合で連結



分子レベルで明確な"形"のある高分子を合成し、未踏の潜在物性・機能を切り拓く！



井改研究室では、合成高分子・超分子の高次構造制御を基軸として、分離・認識・触媒・運動・情報等に関連する高度な機能を備えた高付加価値材料の創出を目指した研究を展開しています。構造設計性の高さから、環状の繰り返しユニットが二本以上の化学結合で連結した“はしご”状の構造を有するラダーポリマーを主な研究対象としています。

最近、「完璧な環化効率と化学選択性に加え、広い基質適用性を兼ね備えた汎用性の高い芳香環化反応」を開発し、欠陥のないラダーポリマーの新規合成法を確立しました。「ラダーポリマーの構造的特徴」と「主鎖骨格にキラリティを導入する独自の分子設計」を組み合わせることで、ヘリカルコイルや、ねじれたリボン、共平面、ジグザグ構造を含む多彩な立体構造の高分子を合目的に合成できることを実証しました。さらに、計算科学と融合により、円偏光発光や不斉識別に関連する機能発現にも成功しています。

最近の研究成果

随時見学受付中! e-mail: ikai@chembio.nagoya-u.ac.jp

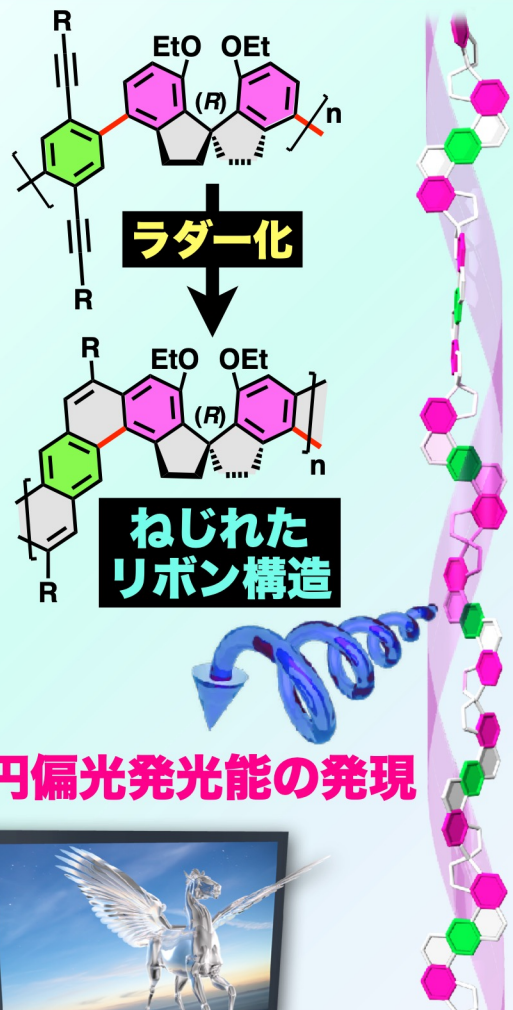
井改研究室

(超分子・高分子化学研究室)

最近の研究成果を紹介します。ラダー化技術を駆使して合成したねじれたリボン構造の高分子が、優れた円偏光発光能を示すことを明らかにしました。これは、3Dディスプレイや量子暗号通信等に応用される未来の光学材料の可能性を切り拓く重要な成果といえます。さらに、ヘリカルコイル構造を構築し、不斉な空孔を生み出すことで、キラル識別能の発現にも成功し、この技術は、鏡像異性体を分離可能なキラルカラム開発に応用されています。

また、連鎖重合と超分子重合が交互かつ連続的に進行する“乗り継ぎ型メリーゴーランド重合”を開発し、二次構造を有する高分子が末端間で非共有結合的に連結した生体類似の一次元超分子集合体の合成にも初めて成功しています。重合の過程で、世界最高の不斉増幅が生じることも明らかにしました。

このように、井改研究室では、高次構造を有する高分子の合成と機能発現の研究を精力的に行っており、実用的に役立つ次世代材料の開発を目指しています。Zoom等を用いたオンライン面談も可能です。興味のある学生は、井改までメールにてご連絡下さい。

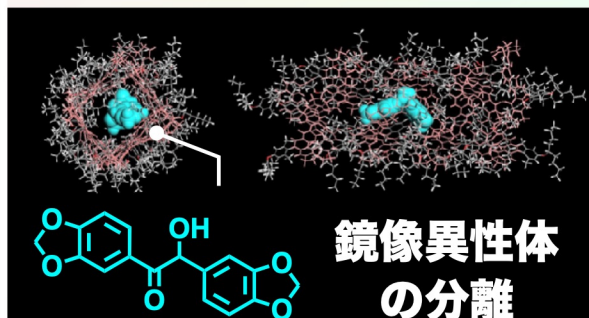
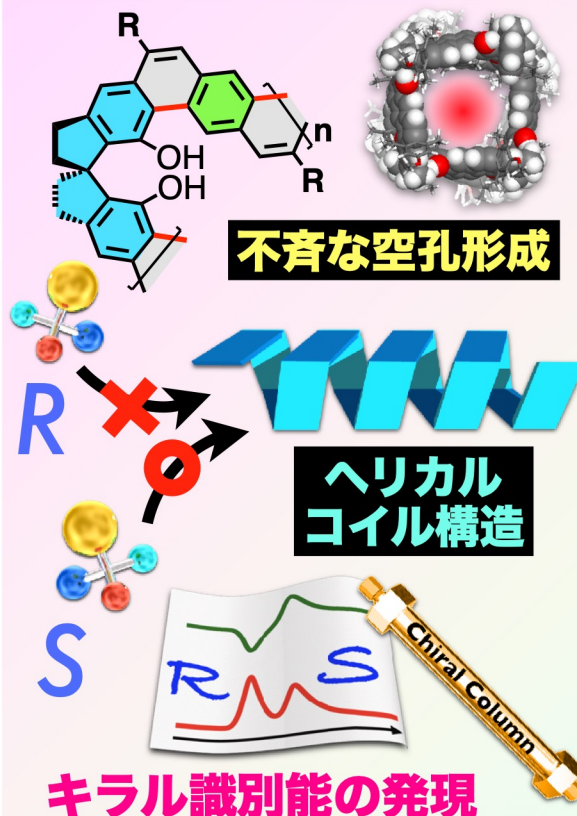


円偏光発光能の発現

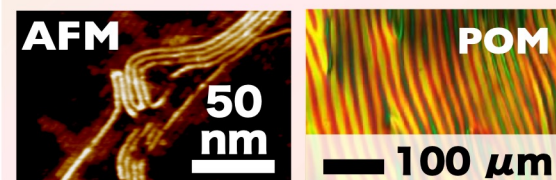
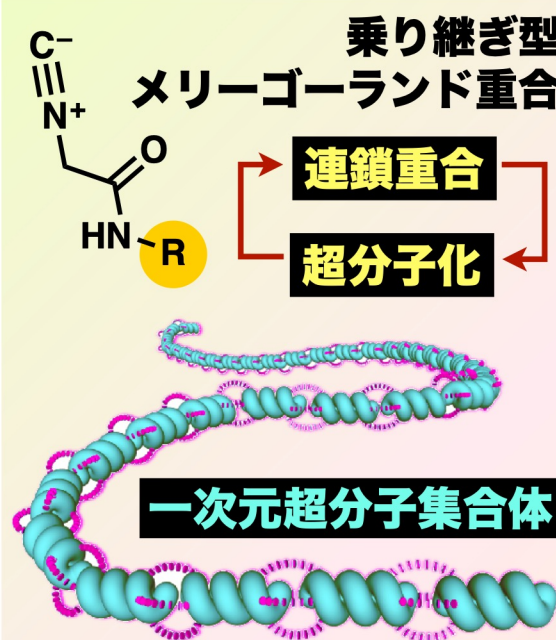


高輝度発光
3Dディスプレイ

Angew. Chem., Int. Ed. **2021**, 60, 11294.
Angew. Chem., Int. Ed. **2023**, 62, e202301836.
Angew. Chem., Int. Ed. **2024**, 63, e202318712.



Angew. Chem., Int. Ed. **2023**, 62, e202218297.
Macromolecules **2025**, 58, 6943.



円偏光発光フィルム

J. Am. Chem. Soc., **2019**, 141, 13995;
J. Am. Chem. Soc., **2020**, 142, 3254.